

学問的知見の授業への反映についての一考察

「英文法」における事例

Some Notes on Introducing Academic Knowledge into Class

— Cases in English Grammar Courses —

山 崎 英 一

Eiichi YAMASAKI

キーワード：英語学、英文法、学問と授業、認知言語学、理論語用論

0. 序

学問的知見を授業に反映することは授業担当者にとって当然のことであるが、授業の種類や内容、レベル等々により反映・導入の難易には違いがあると思われる。本論稿では、英語学とその成果の普及の場の一つとしての「英文法」にその一例をみたい。¹⁾ 具体例は現在進行形・完了形等時制関係が中心であるが、ここに認知言語学系視点や語用論の視点という昨今の学問的観点を加えることで指導が簡潔になり得ることをみる。

1. 「英文法」：現在進行形にみる問題

本節では学問的知見の反映が望まれる文法項目例及び問題となる個所を紹介し、学問的知見導入の有望性をみたい。なお、本稿で前提としている「英文法」の授業レベルであるが、いわゆる学校文法の基礎固めや発展、及び会話等での応用を見越して運用力向上を主目的とするものである。故に知識的には高校までの学習内容の理解確認や補足が中心となっており、知識的に高校レベル後の段階のものや英語学系専門教育の導入部としての授業ではない。故に例えば Huddleston & Pullum (2005) や Chomsky 系統語論の入門書を扱うものではない。具体的には筆者の所属機関・学科（四天王寺大学における国際キャリア学科）での担当授業である「英文法」を念頭に、その授業内外での練習作業時には問題集として、及び時に参考図書として用いる Murphy (2009) での問題例を検討することとなる。

以上の前提で本節では、現在進行形の説明に問題をみよう。Murphy (2009) では最初のユニット（見開き）が「現在進行形 (I am doing)」となっており、冒頭部である A 部において、車を運転中のイラストと共に次の (1) のような例文・説明がされている：

(1) Sarah は車に乗っていて、仕事に行くところです。

She is driving to work.

話し手が話をしている瞬間（現在時）に、彼女は車を運転しています。（Murphy（2009））

この説明では、現在進行形が発話時にある動作が進行中であることを示している、としていることになる。

問題はそれに続く B 部の下半分において、電話中のイラストと共に次の（2）の説明をしている点にある：

（2）Steve は電話で友達と話をしています。

I'm reading a really good book....

話をしている時、Steve は電話をしています。本を読んでいるわけではありません。...

現在進行形が話をしている瞬間に進行していない動作を表すことがあります。

（Murphy（2009）引用。下線部は筆者による）

（実際には（1）にも（2）にももう少し説明はあるのだが）下線部を（1）の説明と対比させると、矛盾か、少なくとも「では現在進行形は一体何を表現しているのか」との感に至るであろう。

矛盾として捉える場合には、要するに（1）の「進行形は発話時に進行中の動作を表す（表さないとイケない）」と（2）での「進行形は発話時に進行中の動作を表さない」の部分との対立が問題ということになる。両例を基によく考えてみれば、（2）は一時的に中断している場合であり、その場合には容認可能ということであるが、その場合でも、物理的に発話の瞬間その動作をしていないという点をどう扱うかが問題となり、結局は進行形が表しているのは何か、の問題を避けることはできなくなる。なお、A と B とが同一ページの上半分において連続して記されていることから、（1）（2）部を全く異なる用法と解釈することも困難である。参考図書とはいえ授業用として使用している限り、A、B に関し、担当教員が何らかの補足説明を行う必要があるのは明らかである。²⁾

次節ではこのような例に対し、学問的知見の貢献を検討するが、学問的知見導入の問題自体もみたい。

2. 学問的知見の紹介・導入に関する問題点

本稿冒頭部で述べたように、大学である以上、学問的知見を授業に反映しようとすることはある意味当然のことである。その意気込み・指針とは裏腹に、このことは必ずしも容易なことではない。本節ではそのことを概観する。

昨今学問が細分化され、英語学と一括りにしてもその中には多くの下位部門があるばかりか、様々な学説・理論があることにもおそらく異論はないと思われる。このような中で、学問的知見の紹介としては授業としての「英語学」が考えられ、「英文法」は知識的には更にその下位、ないし入門レベルと考えることができなくもない。このような状況下で、学問的知見のまとまりとしての各学派ないし理論を念頭に、知見を「英文法」に反映や紹介、導入をしようとする

際の問題点として、例えば(3)の二点があろう：

(3) 学問的知見の導入に関する問題点

- a. 時間がかかりすぎる。かける時間の割に効率が悪い。実用性が低い場合がある。
- b. 全てが解決できるわけではない。

この二点に関し以下に簡単に説明を加える。

(3a) に関しては、そもそも、かつての英語学の土台的共通認識が英文法であるとする、それへの学問的知見の源の候補となる昨今の英語学を指導する時間が(実用上)ないと総括的に述べることができよう。かつて、英語学の素養が学科専門領域の中核(の一つ)であった学科(言語文化学科英語英米文化専攻)において、ゼミの紹介授業として数回単位で各教員が英米文学や英語学の紹介を行ったことがある。その際筆者は専門である理論語用論での基礎・入門と言うべき Grice 派の推意(implicature)、いわゆる「行間の意味」の理論紹介を担当したが、学生は数回程度では理論の基礎概念の理解・記憶はできても、実際の例への適用は不十分で、当然考え方の英文法への適用は無理であった感がある。また逆に、特定の文法項目(例えば時制)を英語学的に扱おうとするなら、それだけで半年程度必要となると思われる。英文法全域と迄はいかなくとも、統語論部門、意味論部門等々のいずれかを扱おうとするだけでも、理論理解だけで年単位の修養が必要であるのは、学部生・院生を経験してきた過去を有する教員全員が理解しうると思う。

当然であるが、例えば、文法項目一つに半年かかるのであれば、その「英文法」授業は非常に効率の悪いものとなり、開講は現実的なものではない。また、知見が複雑なものであればあるほど、実際の場面での適用も現実的な処理時間で可能とは考えにくいものとなり、昨今の「英文法」が目指す実用的な英語を組み立てる・処理する道具とはなりにくいと思われる。

更に、(3b)にも至ることであるが、せっかく指導しても、理論によってはそれに見合う事例が少なく、「英文法」的に解ける項目・問題が少なく、効率が悪いことになりかねない。また、英語学という学問が、未だ積極的に研究の場として盛んであることから、当然のことであるが、英語にまつわるすべての現象が解明できているわけではない。以下でも多少見るが、せっかく導入した枠組みでも解けない事象がある場合、そもそも導入・紹介の必要性が疑われるであろう。³⁾

以上のことから得られる結論は非常に常識的なことになる。すなわち、通例、理論単位での知見の導入、つまり理論丸ごとの導入は非現実的であるということになる。この結論は必然的なことではないので、理論によっては全体の導入が可能なものもありえようが、一般的には理論そのものや、枠理解を前提とするような知見の反映を考えるのは実用的でない。そこで、現実的な解として学問的知見の授業への反映を考えるならば、断片的なものないし、理論枠の理解なしでも利用できる程度のもの等での反映を考えることになる。次節ではその断片的な反映の有用性の一端を垣間見てみたい。

3. 断片的反映の効力

前節で、大枠の導入は現実的でないことから、断片的な導入の検討が望ましいことを述べた。本節では、筆者の所属する、認知言語学系となる理論語用論の観点から、断片的な知見の反映の効果について考えたい。

3.1. 認知の現れとしての言語使用

関連性理論の開祖である Sperber&Wilson (1986) のみならず、認知言語学系の学徒一般に、言語はその使用者の認知（現実の捉え方）を反映しているものと捉えると思われる。⁴⁾ この、ある意味当たり前のようでもあるこの言語観を適用するだけでもかなりのことが言えると思われる。例として上記（1）（2）を再考しよう（例を再掲する）：

（1）Sarah は車に乗っていて、仕事に行くところです。

She is driving to work.

話し手が話をしている瞬間（現在時）に、彼女は車を運転しています。

（2）Steve は電話で友達と話をしています。

I'm reading a really good book...

話をしている時、Steve は電話をしています。本を読んでいるわけではありません。...

現在進行形が話をしている瞬間に進行していない動作を表すことがあります。

上記第1節で述べたように、物理的に（1）を「発話時に進行中の動作」、（2）を「発話時に進行していない動作」と捉えると、各々は事象的には正しくとも、双方を合わせて現在進行形の意味を考える場合に、その整合性に難がある。これを明示的に示すと（4）のように表すことができます：

（4）「発話時に物理的に進行中の動作」vs.「発話時に物理的に進行していない動作」

この場合、上記のように矛盾するとする（となるとテキストの記載が間違いということになりかねない）か、あるいは両者（相反するという点で意味の分化に疑念は生じるが）別用法とするなりして説明不足を補うこととなろう。一方、認知系言語学的視点から捉えると、例えば次のように捉える事ができよう：

（5）（1）は物理的・客観的にも主観的にも動作中の出来事の描写である。

（2）は主観的には動作中の出来事の描写であり、問題の動作は物理的・客観的には止まっているが、中断しているだけで主観的にはあくまで動作中である。

実際（2）は、動作前ないし後で動作を一切していない状況ではなく、また、動作が途中で打ち切られている状況を示すものでもない。⁵⁾

人の認知の反映という視点から、(5) は更に次のように一般化することも可能である：

(6) (1) (2) は(物理的・客観的な進行の有無はともかく)主観的に進行中の動作を表す。

この場合、(1) と (2) の例は同一の用法で、たまたま主観(心情)と物理的現実世界とがずれている例にすぎないことになる。⁶⁾

このような、人間による世界の認識具合という観点から文法を見ると、未来表現の使い分けにも一貫した視点での説明が可能となってくる。まず Murphy (2009) での説明を見よう。UNIT 22 (「I will と I'm going to」) において、will と be going to の二形式に関し、(7) のような説明がされている：

(7) a. will ('ll) は「…しよう」のように、話している時点で決めたことに用います。

例：Sue は Erica に提案します：

S: Let's have a party.

E: That's a great idea. We'll invite lots of people.

b. (be) going to は「…するつもり」のように、話す以前に話し手が決心していたことに用います。⁷⁾

例：その後、Erica は Dave に会います：

E: Sue and I have decided to have a party. We're going to invite lots of people.

(Murphy (2009) より引用。太字はママ。下線は筆者)

特に (7b) において、未来の話をしようとするのに過去の状況から検討しなければならないのは納得しにくいことであろうと思われる。中核的な部分で納得できないということは、本質的な部分で理解・習得できない、しかねるということでもあろう。⁸⁾

Murphy (2009) が挙げているような状況では確かに (7a,b) で両形式の違いが(少なくとも表面的には)特徴づけられるのだが、この観点では (8) の二例の違いを説明できない：

(8) a. It will rain.

b. It is going to rain.

((8b) は Murphy (2009))

両者とも成文であり、(8b) は特に発話時に空が曇天で、今にも雨が降りそうな状況時に用いるが、(発話者にしろ、「天候の it」(通例虚辞とされる)にしろ)発話以前に(降ることを)決心していたとは考えにくい。Murphy (2009) では「現在の状況から未来の出来事が確実に予測できる場合、(be) going to を用い」とするが、(7) とは別用法ということになってしまう。

これに対し、人の認識という観点から考えれば、(be) going to を進行形とつながる表現として捉え、(7b) (8b) で一貫した受け止め方が可能となる。つまり、両者共に、主観的に(ない

し比喩的に) 特定の動作に向かって進行しているということであり、これは現在進行形と“go”との組み合わせが基になっている。つまり、上記のように現在進行形を「発話時点で主観的な意味で進行中の行為を表す」とし、その行為が“go”ということであれば、(be) going to 全体は基本的には「発話時点で主観的な意味でのゴール(“to”で表現)に向かって進行中である」ということになる。例に当てはめてみると、(7b)では招待するという未来の動作に向かって比喩的に現在進行中であり、(8b)では雨が降るという未来の動作に向けて進行中ということである。比喩的な意味で進行中ということであれば、今現在雨が降っている必要はないが、雨降りに向けて天候が悪化しているように見える曇天の認識が問題の表現を使用する根拠となろう。

以上、認知言語学系の基本的な言語観から可能となる文法説明の例を二点紹介した。次に筆者の属する理論語用論からの知見の導入例も見てみたい。

3.2. 「行間の意味」という観点

理論語用論の核は(異論はあり得るが) Paul Grice による implicature (Levinson (1983) 参照のこと)を中心としたものであり、昨今の中核的な理論である関連性理論においても非常に重要な理論概念となっている (Sperber & Wilson (1995)、Carston (2002) 参照)。Grice の枠組みと関連性理論のそれとは、全体像自体はかなり異なるが、本稿のテーマから、断片的導入ということから、implicature をいわゆる「行間の意味」や「暗示」として捉え、文法項目での適用を通して「英文法」での利用を見たい。

まず現在完了形を見よう。実用的な使用の観点から山崎 (2016a) で現在完了形に関して以下 (9) のように記した：

- (9) 関連性理論では、現在完了形の意味を「過去に生じたことが現在に何らかの影響を与えている」という観点のみで捉えている。一つの観点から把握できるのであれば、実際の使用に転じるのも比較的容易と考えられ、受講生の負担も低減でき、有用性は高く、「四区分がきまりだから」という判断に安易に頼るべきでないことは言えよう。

後半部はつまり、一つの観点・用法のみ押さえれば良い点で実用的であり、従来よく知られている完了形の四用法・区分(「完了、結果」、「継続」、「経験」)の理解・分類を経てからの使用練習よりも効率的である可能性に言及している。

(9)での、「過去に生じたことが現在に何らかの影響を与えている」という観点は最近のテキストや学習書でも見かけることがあり、Murphy (2009)でも同趣旨の記述がある (p.16)。本論稿では、従来の完了形に関する四区分の設定が必要かどうかに関しては議論せず、山崎 (2016a)で触れた(10)について、「過去からの何らかの影響」を踏まえ、理論語用論的な行間の意味の観点から分析したい：⁹⁾

- (10) I've lost my key.

(山崎 (2016a) 第2節 (1a))

現在完了の紹介時の例としてもよく見かけ、Murphy (2009) にも記載のある (10) は、通例、「今も鍵がない。」という意味があるものとして紹介される。ただしこの意味は常に生じることはなく、例えば、今までにあったひどい出来事を尋ねるような状況ではこの読みは生じない。

問題の意味を「行間の意味」として考え、理論語用論一般のように、文脈次第で生じる（ないし打消しできる）ものとし、これと核となる現在完了形の意味とをあわせて考えてみよう。上記の基本的な意味より、「過去に生じたこと（(10) の場合鍵をなくしたこと）が今に影響を与えている（鍵をなくした影響の顕著な例としては今もないという形での影響）」となろう。一方で今までにあったひどいことを聞くような文脈では、現時点にいたるまでの間でのひどい出来事自体に力点があり、その影響は今に至る経験として理解されると考えられる。この場合、「今も鍵はない」と考える必要はなく（いやな思い出ないし、ひどい出来事1度という回数的な影響になろう）、従来であれば「経験」用法とされるであろうこの状況時には通例この行間の意味は生じない。

Murphy (2009) では現在完了形について「『最近（たった今）…した』のように、今まででなく最近起こった出来事は現在完了形 (I have done) で表します」としている。しかしながら、「最近」がどの程度の時間幅を有しうるのか、具体的な記述はない。この点に関しても、本稿の観点からすれば、数学的な捉え方（例えば影響がない場合を0の影響が現在にあるとしてしまうと、それこそ過去形との区別が困難になる）はともかく、言及に値するほどの影響が現在に残っているという認識の点から考えるなら、その認識が「最近」という主観的感觉で捉えられている、つまりは影響を感じるほど時の隔たりを短く感じているという主観的くくりで捉え得ると思われる。つまり、Murphy の「最近」観も本論稿の観点では派生的に説明でき、ひいては学習負担の低減も可能なのではなかろうか。

また、Murphy (2009) で現在完了形と過去形との違いについて、時に後者でも同じことが言えると述べたり、前者のみや逆に後者しか使えない例文を挙げたりしているが、説明不足の感が強く、両者を区別できるようになるというよりは逆に混乱しそうな記述となっている個所がある。上記のように、「現在に残る影響」とその影響の具現化としての「行間の意味」という観点から実質的に両者のいずれでも大差なく類儀的に使える場面や両者対立する場面を再考・吟味する価値はあろう。

しかしながら、その一方で、第2節で記したように、学問的知見の導入がすべてを解決できるとは限らない。例えば、Murphy (2009) は「最近起こったとは考えられない過去の出来事には、単純過去形しか使えません」とし、次の例を挙げている：

(11) Mozart was a composer. He wrote more than 600 pieces of music. (× has been... has written)

() 内はつまり、この場合過去形を用いるべきで、現在完了形を用いた “Mozart has been a composer. He has written more than 600 pieces of music.” が英文として（内容的に）良くないということを示している。ここで、モーツァルトが現在生存していないという事実が現在への影響の有無の判断に関与していると思われるが、どの程度の影響力があれば現在完了形を使える

のか、という点は少なくとも英語が非母語である私個人の感覚上ははっきりしない。ただし、この問題点も、結局は「影響」が主観的に捉えられるものであり、その捉え方は文脈に左右される以外に、言語圏・文化圏によっても異なることを証明するものかもしれない。つまり、英語母語者にとっては充分明瞭でありえても、例えば日本文化圏で育った日本語母語者にはぴんと来にくいところに「影響の有無」(ないし「最近」)の判断の分かれ目があることを示すものかもしれない。

「行間の意味」という観点は、“yes”の多彩な動きの説明にも有益かもしれない。例えば(12)を見よう：

(12) 相手の意向が不明な時等：Yes?

(12) はしり上がりのイントネーションで発話される。単に日本語の「はい?」と訳すことも可能なため特に意識することがないように思われるが、冷静に考えてみると非常に奇妙である。もう少し状況に合わせて「何でしょうか?」という日本語に対応するものとして捉えるならば、表面的には肯定の合図と疑問のイントネーションのみであり、疑問のイントネーションから問いかけの機能は生じるとは言えそうである一方で、別の単語はおろか、形態的に接頭辞や接尾辞に相当するようなものがないため、「何」に相当する情報を表現しているとはいいがたい。『ユースプログレッシブ英和辞典』(2004)によればこのような“Yes?”に例えば次の諸用法を当てている：

- (13) a. (相手の言ったことに疑いを表して) そう、へえ
- b. (相手に話の先を促して) ははあ、それで
- c. (待っている人などに向かって) でご用は

これら全てが語“yes”の意味としてあるというよりは、疑問に使われるイントネーションと共に特定の文脈で使われることで、その文脈に応じたさまざまな「行間の意味」を生み出していると考え、その観点から指導するほうが、「英文法」指導の一環としても健全かもしれない。もちろん、上記(11)に関連して記したように、全てが解けると断言できる段階でもなく、具体的な分析については今後の課題としたい。

以上本節では、学問的知見のほんの断片からでもいくつかの文法項目の説明がつき、「英文法」の授業の益とでき得ることを(限界例と共に)示した。

4. 結び

以上、国内外で定評のある Murphy (2009) を踏み台に、学問的知見の授業への反映というテーマに関して述べてきた。「英文法」で扱う全域を俯瞰したわけではなく、扱った現象はほんのごく一部であり、偏ったものでもあった。が、わずかな知見でも、授業における説明力を向上させ得ることを見た。授業で扱う項目全域をこのような知見で見直すことで、授業改善につ

なげると共に、逆にその基となる言語理論の限界や不備、問題に気づける可能性もあり、単なる一授業用の作業を超えた成果も期待できるかもしれない。

注

- 1) 本論稿では、授業としての英文法（英文法系の授業）を「英文法」とカッコ付で表示することとする。
- 2) Murphy (2009) の原書版には初級編や米版等他のバージョンがあり、日本のネット書店 Amazon で「ベストセラー 1 位」の称号に加え、多数のカスタマーレビューがあり、ebook 版が使いづらい等を除くと概ね高評価である。米の Amazon でも同様の傾向にあった。しかし、本文で指摘のように、A 部と同一ページ内直下の B 部とを続けて読むと、各部では明瞭であった記述が整合的に整理できない箇所が散見する。このことから、(レビュー等での認識とは異なり) 学修者の自習用には不適切と考えられ、授業用として使用する場合も注意が必要である。ただし、このような現象は経験上国内外の英文法書で見受けられることであり、Murphy 固有の問題とは言うわけではない。
- 3) 現代の理論系言語学では、英文法であれば例外扱いであったであろう事例を、理論への反例とみなすのが一般的であると思われる。故に厳密に述べると、反例がある限り、その理論は不完全であり、改善を図るべきものとなるだけでなく、別理論で置き換えられるということもあり得る。このことは、せっかく多大な労力と共に理論に関する学習を進めても無駄になる可能性があるということになる（学問的には否定は学問的發展に貢献するものであるものであるので無駄ということはないが）。
- 4) この言語観は昨今の学界における常識の見方の一つとも言えると思われるが、例えば伝統的な真理条件的意味論でのような、客観的な事象との対応関係で捉えようとする言語観とは大きく異なることに注意したい。
- 5) (5) の (2) に関する分析に関し、筆者はオリジナリティを唱える者ではない。数十年前に目にした文献で出典が不明なのだが、(1) を動作（意味項目ないし意味関数として ACTION を設定）が進行中、(2) を出来事（同様に EVENT を設定）が進行中とする分析を目にした覚えがある。ただしこの分析は (1) と (2) とを意味概念（ACTION vs. EVENT）的に区別はしており、本論稿下記の (6) のような一般化ないし普遍化は困難と思われる。
- 6) この点に関し、時に英語とは対応訳が異なる（例えば「しつつある」になる場合がある）日本語例においても以下のようにパラレルに扱えることに傍証される、ないしは日英語で認識が一致している例証となることを指摘したい：
 - (1') 彼女は（職場に向けて）車を {走らせています／走らせているところです}。
 - (2') 私は面白い本を {読んでいます／読んでいるところです}。
 (1) (2) に対応する日本語においても、両例を「している」や「ところである」で扱えると共に、少なくとも直観的には (2') においても物理的にはしていないことを、そう指摘されるまで意識しないことに注意されたい。言語が客観的な存在を示すものであるなら、物理的にしている場合としていない場合とが同一の形式で表現できるというのは、その意味の隔たりの大きさから、全く異なる二言語におけるこのような平衡性を正当化しにくいと思われる。
- 7) 例えば (7a) の「決めた」の主語が、日本語版である Murphy (2009) でははっきりしないが、Murphy (2012) においては (7a, b) の対応箇所は不明瞭である：
 - (7) a'. will ('ll) : We use will to announce a new decision.
 - b'. (be) going to: We use (be) going to when we have *already decided* to do something.
 (Murphy (2012) より引用。太字・イタはママ)
 (7a') に関しては “a new decision” であり決定者は不明であり、発話者ではなく発話に生じる主語の可

能性も高い。(7b')においても、日本語版監修者の判断と異なり発話の主語の可能性がある。なお、(7b')は現在完了形による説明であることから、厳密には「過去においてした判断が (be) going to を使う際に影響力を持っている」と捉えるべきかもしれない。

- 8) このような説明は Murphy (2009) に限られるものではない。十数年前のことになるが、ロンドンのとある語学学校で、まったく同様の説明を繰り返している状況に立ち会ったことがある。記憶違いでなければ Murphy 氏執筆テキスト使用ではなかったのも、海外ではよくある説明なのかもしれない。
- 9) 学問上一元的な扱いをしていることから、以下の説明では「完了」と「経験」とを区別なく分析しているが、学習効率上四区分を撤廃すべきかどうかは別問題である。学問上はともあれ、「英文法」指導の経験上、「経験」は「したことがある」、その他は「した」(過去形との違いは「行間の意味」で説明する)程度のことはしておいたほうが学生の混乱は少ない気はしており、学問上はともかく、指導の便宜上このような二区分は残すべきかもしれない。

参考文献

- Ariel, Mira (2008) *Pragmatics and Grammar*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Atlas, Jay David (2005) *Logic, Meaning, and Conversation: Semantical Underdeterminacy, Implicature, and Their Interface*. Oxford University Press.
- Blakemore, Diane (1992) *Understanding Utterances: An Introduction to Pragmatics*. Blackwell. (武内・山崎(訳) (1994)『ひとは発話をどう理解するか』ひつじ書房.)
- Carston, Robyn (2002) *Thoughts and Utterances: The Pragmatics of Explicit Communication*. Blackwell. (内田ら(訳) (2008)『思考と発話：明示的伝達の語用論』研究社.)
- Jackendoff, Ray (1987) *Consciousness and the Computational Mind*. MIT Press.
- Levinson, Stephen. C. (1983) *Pragmatics*. Cambridge University Press.
- Murphy, Raymond (2009)『マーフィーのケンブリッジ英文法(中級編)』Cambridge University Press. (*Grammar in Use Intermediate 3rd edition* の日本語版).
- Murphy, Raymond (2012) *English Grammar in Use (4th edition)*. Cambridge University Press.
- Quirk, Randolph ら (1985) *A comprehensive Grammar of the English Language*. Longman.
- Sperber, Dan and Deirdre Wilson (1986, 1995(2nd)) *Relevance: Communication and Cognition*. Blackwell.
- Wilson, Deirdre (2010) “Metarepresentation in Linguistic Communication.” Dan Sperber(編) (2010) *Metarepresentations*. Oxford University Press.
- Wilson, Deirdre and Dan Sperber (2012) “Explaining irony.” Wilson, Deirdre and Dan Sperber(編) (2012) *Meaning and Relevance*. Cambridge University Press.
- 八木克正他編 (2004)『ユースプログレッシブ英和辞典』小学館.
- 山崎英一 (2015)「研究としての英語学、授業としての『英語学』：談話的空所化とその二分析を題材に」『四天王寺大学紀要』59号.
- 山崎英一 (2016a)「『きまりだから』ではすまない英文法指導」『四天王寺大学教育実践論集』第2号.
- 山崎英一 (2016b)「授業としての『英文法』から『英語学』、英語学へ：類義語からの一考察」『四天王寺大学紀要』62号.
- 山崎英一 (2017a)「授業改善についての一考察：モジュールから見た『全体 vs. 部分』」『四天王寺大学教育実践論集』第3号.
- 山崎英一 (2017b)「実用性と英文法：学んできた英文法の有用性についての一考察」『四天王寺大学教育実践論集』第4号.